

サル誘導にドローン

威嚇し人里から山林へ

人里に下りてきたニホンサルを小型無人機「ドローン」で威嚇して山林に追い返すシステムを、安曇野市の無線機器製造会社「サーキットデザイン」が横浜市の電子機器商社と共同で開発している。12月初旬に安曇野市で実施する初の飛行実験に向けて準備中で、開発担当者は「里山の人口が減少する中、人と獣のすみ分けを維持する新たな手段になれば」と期待している。

【川辺和将】

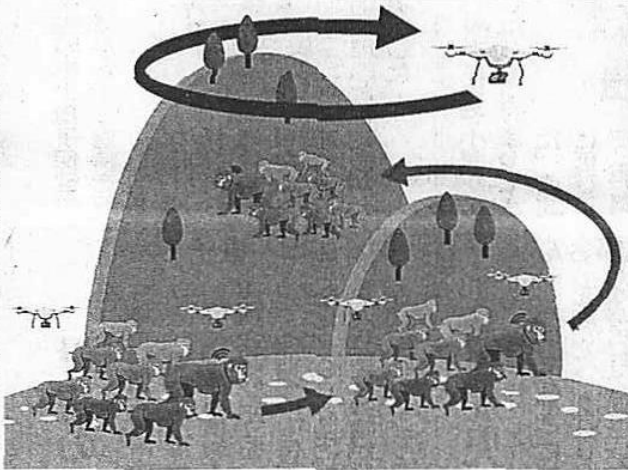
安曇野の企業など開発

農林水産省による動で飛行し、ニホンザルと、猿によるリンゴなどの農作物被害額は全国で約13億円に上り、長野県は約1億円でワースト1位(いずれも2014年)。県鳥獣対策・シビエ振興室によると、里山地域での人口減少によって猿が人里に下りやすくなっている上、追い払う人手の確保が難しいのが現状だ。

計画されるドローンは直径約1分。最高時速約70キロであらかじめ指定されたコースを自

動で飛行し、ニホンザルの群れをセンサーで感知すると、威嚇して人里を離れた山林へと誘導する。威嚇手段は「音波や低空飛行での接近など、なるべく猿がかわいそうでない方法」(開発担当者)を検討しているという。この計画はサーキットデザインが考案した。地球測位システム(GPS)と捕獲されたことのある猿に付けられた首輪型発信機を使用して群れの位置を特定するシステムを

開発した同社が「さまざまなセンサーを組み合わせては有書鳥獣対策に使えるのでは」と高性能センサーなどの開発に携わる横浜市の電子機器商社「明光電子」に提案。今年度、明光電子が神奈川県から補助金1000万円を得て共同開発が始ま



ドローンでサルの群れを山林に誘導する新システムのイメージ図＝明光電子提供

った。

「期待は大きいですが、技術的ハードルも高い」と開発担当者。離合集散を繰り返す群れの動きに合わせて飛行する難しさだけでなく、学習能力の高い猿は一度、反応した仕掛けにも慣れてしまう可能性がある。明光電子営業促進課・根本敬継課長(51)は「頭の良い猿に使えるなら、他の動物にも使えるはず。あえて最も手ごわい相手を選んだ」と話す。

ドローンは既に本体部分の組み立てを終え、12月初旬に安曇野市の河川敷で初の飛行実験を実施。来年2月には、神奈川県内で猿の群れを威嚇する実証実験を予定しているという。根本課長は「ニホンザルの出没で知られる静岡県の伊豆半島出身で「猿はミカン畑を食い荒らす害獣であると同時に、豊かな自然を象徴する身近な存在でもある。技術を駆使して人と猿が共存する道を見つきたい」。